

増 月

修禅寺・寺報
Shigetsu

発行所： 福地山 修禅寺 〒410-2416 伊豆市修善寺964 電話 (0558) 72-0053 FAX (0558) 72-9680

平成26年

第56号

8月21日

金剛力士吽形像

金剛力士阿形像

山門修理、完成間近。

◇特集

◎ 裏山 第一期工事完了

山風に誘われて歩く、「古刹の裏道」に憩う。

◎ 修禅寺御膳

修善寺調理会監修：精進料理レシピを紹介します。

伊豆修禅寺指月殿には、阿吽の木造仁王尊像が本尊釈迦如来坐像の左右に立っている。平安時代後期、カヤ材の一木造り等身大の像である。明治の混乱期、下田街道と修禅寺道の分かれ目にあった横瀬の総門から移されたと聞いている。

この仁王像2体が、本堂前に建てられた山門（文久3年＝1863、伊豆市指定文化財）の今回修理に伴い、その左右に新設される仁王堂に安置されることとなった。

今までの釈迦如来像の両脇に仁王像という組み合わせについて、不思議に思われていた方々も多かったことだろうが、これには理由がある。

指月殿は、元々経蔵であるため、本尊は小振りであるが丈六（像高が一丈六尺＝約4.8mの像の呼び名、坐像ではその半分）の釈迦如来坐像で右手に未開蓮を持った「拈華微笑」と呼ばれる珍しい姿をとっている。

修禅寺仁王尊

三十年ぶりの引っ越し

吉備文化財修復所

代表 牧野 隆夫

昭和五十七年七月から、二ヶ年掛けて、仲間とともに指月殿釈迦如来坐像の修理を始めた。作業場所は、現在の宝物館の場所にあった旧幼稚園舎であった。当時、二体の仁王像は指月殿正面左右端の格子戸のすぐ内にしつらえられた小さな部屋で、足元が壊れ立つことも出来ず壁に寄り掛かっていた。

釈迦如来像修理の途中でこの仁王像も直すこととなり、昭和五十九年三月、三体同時に完成させ納めることになったが、修理を終えた仁王像を、雨風吹き込む軒下のような元の格子戸のすぐ内に置くのは忍びない。

釈迦如来安置のため堂内を改造することになり、寺や教委の文化財担当氏から依頼を受け私が図面を描いた。仁王尊の安置場所を大きく後にずらした配置とし、結果として高欄を設けたため、結果として仁王像が釈迦如来像の両脇侍であるかのごとき配置となったが、当時の状況の中で、像の保全のために取った策である。

その仁王尊二体が本来あるべき寺の山門に戻ることとなった。往昔

あったといわれる山門とは異なる場所であるとはいえ、寺の守りとして本来の役目に戻るのである。常日頃から、修理後の仏像が単なる鑑賞の対象でなく、本来的な役割を果たして欲しいと願ってきた修復者として、これほど喜ばしいことはない。

吉野真常御住職はじめ修善寺資料館田中之博館長から像移動のための状態調査を求められ、先日久々に仁王像と対面した。修理後四半世紀の歳月が経ち、気になる部分も生じているため、田口行央護持会長を交えた話し合いの席で、移動協力に加えた若干の手入れを申し出、快く受け入れられた。修禅寺には7、8体の仏像修理に関わらせて頂いた他、奉職した大学の学生達の実習として数日合宿させてもらったこともある。町の方々にも様々お世話になって来た。そのお返し之机会でもある。

九月十二日からは、二つの尊像が新しい山門で仁王立ちし、未来へ歴史を刻み始めるのを拝することが出来る。三十年ぶりの引越しの日を心待ちにしている。



〔写真説明〕

(右上) 山門上棟式
(右下) 基礎工事
(中) 補修され再組立て
(左) 瓦葺きを待つ

お知らせ 修禅寺山門 落慶法要

* 山門修復工事の完成法要です *

(日時) 平成26年9月23日(火)

午前10時より

(場所) 修禅寺山門まえ

◆前号でもご紹介しました修禅寺の玄関とも言える「山門」の修復工事ですが、九月の完成に向けて大詰めを迎えております。

昨年九月の着工以来約十ヶ月、二月には二度の大雪に見舞われましたが幸い大きな支障もなく着々と進行し、六月十日(火)には工事関係者参列のもと上棟式を厳修いたしました。

表紙写真の仁王さま(金剛力士像)は現在指月殿に安置されておりますが、このたびの修復工事完了にあわせて九月十二日(金)に山門脇に御遷座(御移動)されます。

この御遷座を受け、いよいよ、九月二十三日(火)に落慶法要(竣工式)と相成ります。

裏山治山工事

【第一期】終わりました

昨年十月に着工しました寺山の治山事業の第二期工事が六月三十日をもって完了しました。(写真)

工期中、二度の大雪に見舞われ予想外の難工事となりましたが、作業関係皆様の尽力で無事に完了しました。

うつそうとしていた裏山斜面が見違えるようにきれいに整備され、明るい山肌を現しております。



写真 2

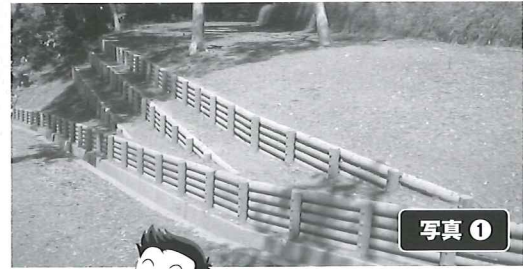


写真 1

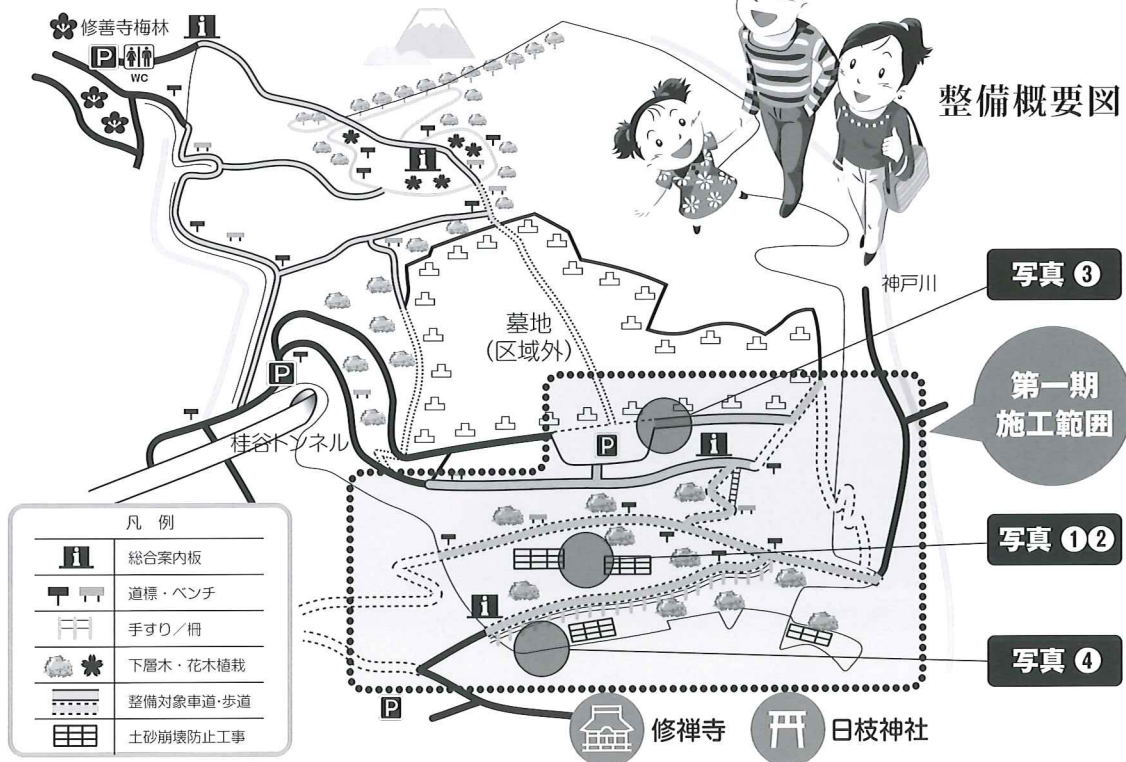


写真 4



写真 3

創作精進料理

修禅寺御膳

●食ルーツの本旨に迫る、作る、味わう。

提供：修善寺調理師会

く
下。
紹
介
！



平成26年度 ◆ 修禅寺御膳

「鰻もどき」

「修禅寺御膳」

修善寺調理師会

会長 大和田健二

私共、修禅寺調理師協会では、旅館組合・観光協会との協同事業の一環として修禅寺慈照閣広間を拝借し精進料理の会を開催致しております。此の催しは、修善寺温泉への招客を目的としたもので、今年で十四回目となりました。

其の概要は、担当者が基本の献立とレシピを作成し、十二・三品の各料理を協賛する旅館調理部に割り充て開催日の定刻（昼食）に合せ慈照閣に夫々持ち寄り調整し提供するというものです。「修禅寺御膳」の本旨と致しましては「修善寺地域で生産された食材を主要な原材料とする精進料理等の提供」とあり、其に則り禅宗精進料理本来の精神的要素をも食材や調理法、献立表記等に配し更に意趣、創作を加え完成させております。

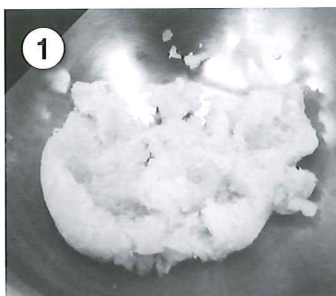
平成二十一年には「修禅寺御膳」

材 料

- 絞豆腐 1丁
- 玉葱 1ヶ
- 牛蒡 50g
- 山芋 50g
- 型用大根 適量
- 白当り胡麻 大さじ1
- 板海苔 (数枚)
- 塩 ● 酢
- 醤油 (白醤油 薄口醤油)
- 酒 ● 味醂 ● 粉山椒
- 片栗粉
- 鰻のタレ 適量

修善寺御膳

鰻もどき

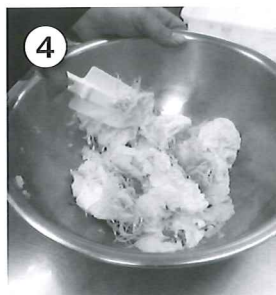


① 玉葱280g (1ヶ)は、みじん切りにし、茹で上げ良く水分を取り冷ます。

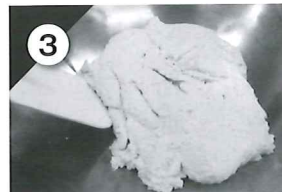


② 牛蒡50gは、細く千切りにし酢水に着けアクを取り、茹で上げ精進出汁に塩3g、酒大さじ1杯、味醂小さじ1杯、白醤油少々で牛蒡に下味をつける。

板海苔を幅4.5cm、長さ21cmに切る。



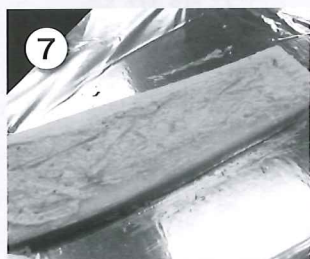
④ ①・②を③の中に入れ良く混ぜる。



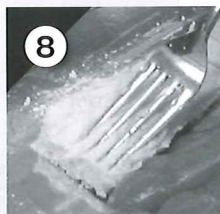
③ 絞豆腐1丁(290g)をミキサーでよくミキシングし、白当り胡麻大さじ1杯、山芋50g、塩少々、薄口醤油少々を入れ下味をつける。



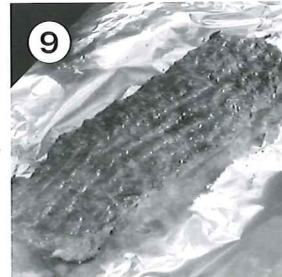
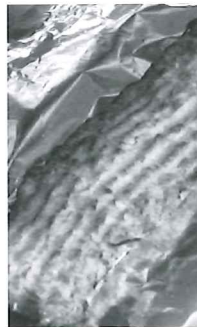
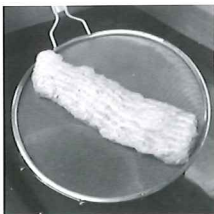
大根は厚さ2cmほどの長方形に切り、板海苔より少し大きめに真ん中を切り落とす。



⑦ 板海苔を大根型の下に引き、片栗粉をまんべんなく型と板海苔に塗り、④を流し込む。



⑧ ⑦を型から外し、フォークで筋目を付け160℃～170℃の低温の油で狐色になるまでゆっくり揚げ、焼き台で焼き目がつく位に焼く。



⑨ 鰻のタレを塗り、仕上げに粉山椒をかける

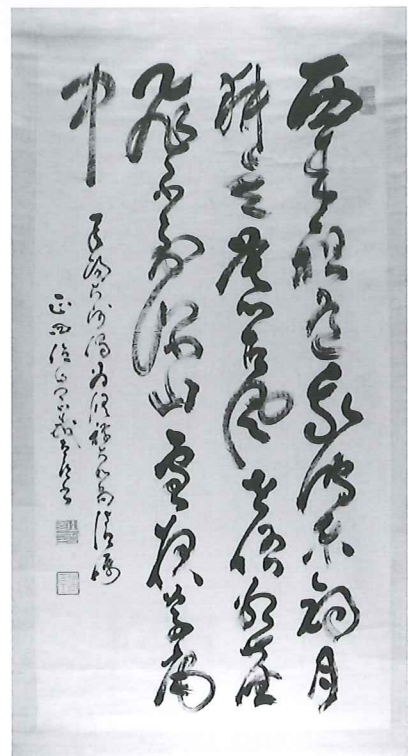
完 成

修善寺御膳

修善寺調理師会が地場産品を使い、腕によりをかけて作り上げた修善寺ならではの創作精進料理です。期間限定の予約制につき詳しくは観光協会(TEL.0558-72-2501)へお問い合わせ下さい。



が商標登録され、回を追う毎、人伝に広まり人気を得、名実ともに修善寺温泉の名物になりつつあります。私共と致しましては、この「修善寺御膳」を代々継承される様努力の程お願い申し上げます。尚、今回の御膳で焼き物としてお出しした鰻もどきのレシピを掲載させていただきます。この料理は見た目、食味、食感が鰻のかば焼と同じ様に作られた所謂偽製料理の代表的なもので車麩で作る豚の角煮もどきや、がんもどき等と共に人気の一品です。是非おためしください。



やまおかてっしゅうのしょ

●山岡鉄舟書 『西来祖道の詩』

西来祖道我伝東釣月
耕雲慕古風世俗紅塵
飛不到深山雪夜草庵

中 常陽大師偈為修禪大和尚清囑

正四位山岡鐵太郎書

印章 「山岡書印」 白文方印

「鐵舟居士」 朱文方印

曹洞宗開祖道元禪師の著『永平広録』に収められている漢詩であります。

〃西来の祖道、我東に伝つ。〃

西の方インドから伝わった、禪の祖達磨大師のころを、私は日本に伝える。

〃月を釣り、雲を耕す、古風を慕う。〃

漁師が釣りをし、農夫が耕すにも似て、大自然の中に身をおいて私も修行に励み古風を慕う。

〃世俗の紅塵、飛べども到らず。〃

ここには世間の煩わしさは少しもない。

〃深山雪夜 草庵の中。〃

いま私は深山の雪の夜の小庵に坐っている。

【修禪寺宝物殿にて公開中です】

おてら

Q & A

前月号より始めました「おてらQ&A」は、お寺や仏事に関する様々な質問について吉野住職がお答えしていくコーナーです。

Q この度、遠方に引越することになり、お墓の移転を考えています。どのようにしたらよいでしょうか？

A 墓地改葬について



1 新たに埋・収蔵する墓地を決めます

新しく墓地を購入するなど埋・収蔵場所を決めます。

2 「改葬許可申請書」の入手と埋蔵証明の受取り

(1) 「改葬許可申請書」を入手します。

「改葬許可申請書」は各市町村により様式が異なる場合がありますので、ご注意ください。

(2) 現在の墓地などの管理者（主にお寺）から「埋蔵証明」を受取ります。

通常、「埋蔵証明」は「改葬許可申請書」の所定の欄に墓地の管理者が証明をします。

3 改葬許可の申請と改葬許可証の受取り

現在の墓地などがある市町村役場の戸籍担当窓口にて「改葬許可申請書」を提出し、「改葬許可証」をお受取りください。



鑑賞

修禪寺

ほうもつ
宝 物 紹 介

今回の修禪寺寺宝紹介は山岡鉄舟の書『西来祖道の詩』をご紹介します。

鉄舟山岡鉄太郎高歩^{たかゆき}「山岡鉄舟」。

知る人ぞ知る、幕末から明治を代表します政治家・思想家・剣豪であり、剣・禅・書の達人として知られます。数々の流派を極め、剣だけでなく、坐禅にも修行の道を求め、臨済宗天竜寺の適水禅師から印可を受けています。また、書道においては太森曹玄老師の著「山岡鉄舟」で、「何と

ても近代では天下第一である」と賞賛されています。その生涯の最後は皇居の方角を向いて坐禅の姿のまま臨終を迎えたのであります。

西郷隆盛、勝海舟など維新の重要人物や明治天皇からの信頼篤く、明治維新の影の立役者と言われています。

本書は山岡鉄舟が明治十五年（十九年）に当時の修禪寺住職大協義件大和尚の為に書いたものであります。

行事・イベント あれこれ

縁と生きる

菊池 竜太

お釈迦様のご生誕をお祝いする「花祭り法要」が行われた四月六日に居合奉納演武をさせていただいたのは、私にとって地元根付いて生きていくと決めてすぐの事でした。

私は生まれも育ちも修善寺で、修善寺には小学生の頃、帰り道によく寄り道をして手水舎から出ている温泉をゴクゴクと飲んで、広い敷地で自由奔放に遊びまわらせていただいた事を思い出します。大学を出た後は沼津市内の企業に就職させていただきました。仕事内容や人間関係に恵まれ、充実した社会人生活を送っておりまして。そんなある日、私に他県にある本社への異動の話が

○お釈迦さまの生誕を祝う「花祭り法要」が生誕日二日前の四月六日(日)に本堂にて厳修されました。法要後は居合・合気道・日本拳法などさまざまな流派の皆様による『記念奉納演武』が本堂にて行われました。迫真の演武に本堂は大きな拍手に包まれました。

持ち上がり、それが大きな転機となりました。長い自問自答の日々を続けた結果、私はこの地に生を受けてから短く少ないながらも築いてきた人々との繋がりを手放してまで仕事を選択することは出来ませんでした。

花祭り法要が行われた当日、本堂にはお釈迦様のお生まれになったお姿のご尊像である「誕生仏」に甘茶を注ぐ花見堂が設置され、大勢の参拝者の方々が誕生仏に甘茶を注がれておりました。そのような厳肅な空気が流れる中で、奉納演武をさせていただきました。居合における演武はただ刀を振り回しているだけのように見えるかも知れませんが、演武の一つ一つには常に仮想敵が存在します。敵対する相手の意思や動きを想定し、全ての所作に理があり、勝ちを得るための技術を一つの武道と



成したものです。それは命の駆け引きであり、刀を振るその一瞬に生きることを見出すことであると私は思います。そのような武道の奉納を、お釈迦様のご生誕をお祝いする花祭り法要の日に行えたことは生きるという事について考えるきっかけになり得たのではないかと思います。

生きることは選択の連続であり、私が地元の縁と共に生きていくことを選択したこともまた一つの生きることの一部であったのだと実感すると共に、これから更に多くの縁に触れ、人間形成を深められることを日々の生活の喜びとしていきたいと

4 遺骨の取出し

改葬許可証を現在の墓地などの管理者に提示して、遺骨を取出します。(その際は、改葬許可証は渡しません。新しい墓地で必要になります。)

5 現在の墓地の更地工事

現在の墓地を更地にして、墓地管理者に返納します。この工事費用は改葬施主負担となります。

6 新しい墓地などへの納骨

改葬許可証を新しい墓地の管理者に提出し、遺骨を納骨します。

※ご注意

新しい墓地の「墓地使用許可書」等が必要な場合があります。

「埋葬届」(管理者の定める様式)が必要な場合があります。

事前に新しい墓地の管理者にご確認ください。

手続き以外の重要なこと

ここで説明したことは一般的な手続きです。

このほか、地域による風習や墓石の制限など墓地管理者による決まり事などについては、遺骨が埋葬されている地域や墓地管理者、および新しい墓地の管理者や地域の情報を前もって調べておくとうまいでしょう。

また、手続きを始める前に、ご親族内で話し合いされることも必要です。

質問等あれば、お寺に来て下さい。お話し致します。(住職)

思っております。

最後になりましたが、このような良縁をいただきました修禅寺ご住職様を始め、多くのご関係者の皆様には厚く御礼を申し上げます。

◆仏教婦人会研修旅行

六月十六日（月）に仏教婦人会の旅行が行われました。

今回は「千五百羅漢と大仏の『日本寺』参拝と東京湾アクアライン」と銘打ちまして千葉房総方面への日帰り旅行となりました。

当日は天候にも恵まれ、参加者みな初夏の房総を満喫されました。



◆通学合宿

七月十日夜から十二日朝まで、修善寺小学校に通う「桂谷子供会」の小学生二十三名と保護者の皆さんが、朝小学校に通い夕方修禅寺に宿泊・坐禅合宿する「通学合宿」を行いました。

昨年続き三回目となり、恒例となったこの行事、今年も朝早く起きでの坐禅にも子供たちはみな真剣に坐っております。良い思い出になれば幸いです。



◆修禅寺のお盆

修善寺地区を含め、中伊豆地域のお盆は七月三十一日～八月三日となっており『晦日盆（みそかぼん）』と呼ばれております。

八月一日夜には、お盆のご先祖さまの総供養『大施食会（だいせいじきえ）』が行われ、法要後には修善寺出身の落語家で真打の春風亭傳枝師匠による『修禅寺寄席』その後『盆踊り大会』が催されました。昨年に続き今年も「盆踊り盛り上げ隊」によるさまざまな露店が出店され、境内は文字通り大いに盛り上がりました。



修禅寺 山内衆紹介

前回より始めました修禅寺におります僧侶・スタッフの紹介コーナー。



柴崎大雲 さん
だいうん

福井県御誕生寺僧堂で修行を積まれ、昨年十一月より修禅寺に上山しました。吉野住職のお弟子であり、前回号でご紹介しました大心さんのお父さんであります。
みなさま宜しくお願いいたします。



御寄附

○坐禅堂礼盤修復 一式

— 下神戸 湯川静子様 —

○竹ぼうき 三十本

— 中里 三須裕之様 —

○ぞうきん 二十枚

— 佐野 飯田さと様 —

○タオル たくさん

— 修善寺 舞楽里市様 —

御懇志ありがとうございます！

行事

〈九月～十二月のお寺の行事です〉

●九月二十三日（火）午前十時

「山門落慶法要（完成式典）」

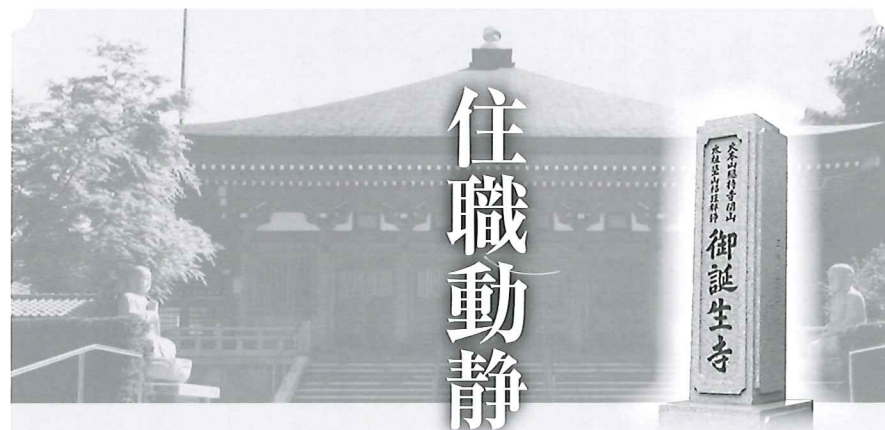
「秋彼岸会法要」

●十一月七～九日（金～日）

「桂谷八十八箇所巡拝」

●十二月十日（水）午前十一時

「釈尊成道会」



住職動静

●十二月二十二日（月）午後一時
「奥の院星祭り」
●十二月三十一日（水）午後十一時
「除夜の鐘」

火曜坐禅会

一月～七月二十二日迄の参加者数
延べ 四八二名

お願い

寺山墓地では、これまで焼却炉を置いてありましたが、寺山の治山事業にともない、消防法の関係でこのほど撤去させていただきました。

**お墓参りで出ましたごみ
は各々お持ち帰りくださり
ますようお願い申し上げます。**



編集後記



今年もか：梅雨明けした途端に猛烈な暑さの日々。体調不十分のままお盆に突入してしまいました。なんとか乗り切ってホッとしております。

2月に2度の大雪に見舞われ、馴れない除雪作業に体じゅうを痛くしたのが昨日のようで、今は猛暑に「ヘトヘト」です。大雪に猛暑に大雨：地球環境が大きく変化していることを肌で感じずにはいられません。

そんな中、世界では今日もあちこちで紛争・痛ましい事件事故が後を絶ちません。日本国内においても悲しい事件事故を目にします。

来年は戦後七十年の節目であります。地球環境の好転と世界の平和を、修復を終え仁王さまをお迎えした山門にお祈りしたいと思えます。

◆指月編集担当

はくりゅう 記



諸行無常

住職 吉野真常

『法』すなわち宇宙のありようを示した、三法印と言うおしえがあります。

一、諸行無常

すべては、一瞬たりとも止まる事なく移り変わって行く。

二、諸法無我

すべての有り様は、我（が）というエゴを越えたもので、因縁果の法則により生滅変化する。

三、涅槃寂静

存在すると言う事は、必ず『いま・ここ』にあり、二度ともどらず、比べる事のできない絶対的なものである。

今年二月の大雪。修禅寺裏の庭園（東海第一園）にある、松が倒れました。直径一メートル以上ある大きな松でした。幸いにも、園中央の池の中に突き刺さるように落ちたため、寺の建築物の損傷はありませんでしたが、回りのカエデ等の木が数本と石の灯籠が倒されました。また檀信徒会館と旧庫裡の間にある小さな庭が雪で埋り旧庫裡の屋根の一部が落ち、塀や木々が破損致

しました。檀信徒会館の空調設備も一時使えなくなりました。寺の内外の被害が、すべて復旧したのは、なんと六月中でした。



六月十日。修復中の山門上棟式。本当に工期までに行けるのだろうかと思いを揉ませている山門もやっと目に見える

て形が整ってきました。落慶式は、九月二十三日（秋彼岸中日）の十時からです。山門両脇には、仁王堂が建（た）ち、指月殿に安置されている仁王さまが遷座いたします。ぜひ御来山下さい。五月。六月。裏の庭園（東海第一園）のツツジ、シヨウブ等の花が例年になく沢山咲きました。寺の責任役員の方々も「こんなに沢山、美しく咲いたのは始めてだ。」と話していました。

すべては、移り変わっているのですね。修禅寺へ入り早五年。移り変わって行く『いま・ここ』を精一杯生きてきたつもりですが、いつかは私も修禅寺を去り、そしてこの世をも去るのでしょうか。これは、必然なことなのです。

春は、春の自然があり。夏には夏の。秋には秋の。冬には冬の自然があるように。私も、二十代。三十代。五十代。六十代と移り変わっております。私と言う固定された者はないのですが、頭の中では、私、すなわち『吉野真常』を変えない者と固定してしまおうのです。「今迄こうやってきたから。」「こうと決めたのだから。」と。

移り変わって行く世界であるから。目の前の事。いま・ここを精一杯生きようではありませんか・必ず死に行く身です。生き・生かされている今に美しい花をそえるよう生きようではありませんか。